

経営学部、地域創造学部、国際社会学部、情報システム学部、看護栄養学部の5学部9学科からなる長崎県立大学。2016年度に行った学部学科の再編および教育課程の改革は大きな注目を集め、現在それに基づく人材育成が地域社会や企業から支持を得ている。改革の内容や目指している方向などについて、木村務学長と二人の学生に聞いた。

現地に行つてこそわかる  
課題の本当の意味

——教育課程の刷新では、どのようなことを重視しましたか。

木村 実学的、実践的な学びを提供する環境の整備に最も力を注ぎました。大学で勉強した知識や理論を実際にさまざまな「現場」で活用、適用する。社会やビジネスの情勢が刻々と変化する今、そうした機会が学生たちの成長には欠かせないと考えたからです。多くの学科で企業や公的機関での研修・インターシップを必修化し、全学共通必修科目として県内の離島の課題解決に取り組み「しまなび」プログラムも設けました。

本田 「しまなび」プログラムでは、学部混成のグループで離島でのフィールドワークなどを行います。私たちは壱岐を舞台に、学習体験と観光を組み合わせた

新聞記事から具体的な事例を拾いながら起きていた事象の根拠や原因を探っていく。そうした作業を通じて論理的に考えることの重要性を学びました。

机の上での勉強と  
企業の活動がつながった

——大学として、学生にどのような成長を期待していますか。

木村 長崎県立大学では学生時代に養うべき力を「KEN-SUN力」としてまとめ、その一つに「知識と知恵」があります。先ほど、「学生には学んだ知識を現場で活用してほしい」と話しました。それはつまり、具体的な課題と向き合うなかで知識を実践の場で使える知恵に転換してほしいということ。そして、その経験を土台にさらに新たな知識を得る。そんな好循環を生み出してもらいたいと考えています。

本田 先生たちからよく、「日々のニュースも自分事としてとらえるように」と言われました。おかげで最近は新聞を読んでも、これが自分自身にどう関係してくるのかをイメージするようになりました。

谷口 私が知識と知恵の関係について感じたのは、実践科目の「企業インターンシップ」で地元の食品会社に行ったときです。約1カ月に及ぶ就業体験のなかで、経済の授業で勉強した「生産・消費・分配」を目の当たりにして、机の上での勉強と

# 現場での試行錯誤の経験が 知識を知恵に転換する

ツアーを企画しました。現地の博物館などへの取材は貴重な体験でしたが、チームで動くことの楽しさ、難しさも実感することができました。

谷口 私たちは新上五島町で島内を巡る旅行プランを考えました。フィールドワークで強く感じたのは、行ってみないとわからないということ。例えば、

ある教会から移動しようとしたらバスが何時間も来ず、歩くことに……。学内で事前リサーチでも交通の便は課題に挙がっていましたが、その本当の大変さは現地でないと感じませんでした。

ラムの目的の一つは、学生たちに試行錯誤を経験させること。なぜならそれは、まさに今の企業が日々行っていることには、このPBL\*を通じて柔軟な思考や応用力、また失敗を糧にすることの重要性を感じてほしいと考えています。

木村 多くのグループは現場での経験をもとに企画の再考やプランの練り直しを行うこととなります。「しまなび」プログ

——二人は、そのほかに印象に残っている授業や活動はありますか。



木村 務 (きむら・つとむ)  
長崎県立大学 学長

九州大学大学院農学研究科博士課程満期退学。西九州大学家政学部教授、長崎県立大学経済学部経済学科長、同副学長などを経て、2019年4月より現職。博士(農学)。



谷口由帆 (たにくち・ゆいほ)  
長崎県立大学 地域創造学部  
実践経済学科 4年

長崎県出身。祖母が暮らす県内の離島(新上五島町)が抱える社会課題を知り、そうした分野を深く学びたいの思いから実践経済学科に進学。



本田祐介 (ほんだ・ゆうすけ)  
長崎県立大学 経営学部  
経営学科 4年

福岡県出身。高校時代に企業や組織について学ぶ経営学に関心を持つ。将来の就職につながる勉強をしたいと考えて経営学科に進学。

実際の企業活動がつながりました。

——企業などからの学生への評価はいかがですか。

木村 おかげさまで企業からの推薦依頼が増えたり、地元自治体による採用が拡大したりしています。採用の現場では「即戦力」という言葉がよく使われますが、資格やスキルに加えて、状況に応じて役割を果たす力も大事な要素であると

——企業が私たちの考え、そうした教育方針を支持していただいていることをうれしく思います。

これからの地域や社会を  
けん引する人材を長崎から

——それぞれ、卒業後の目標を聞かせてください。

谷口 私は地元の銀行に就職予定で、将来は融資業務にも携わりたいと思っています。長崎にはさまざまな産業がありますから、それぞれの強みや特徴も勉強して、どうすれば融資先の会社が成長できるのか。一緒に考えながら、長崎の活性化に貢献したいです。

本田 私が社会人になってテーマにしたのは、「視野を広く持つ」ことです。就職予定の損害保険会社には多様な業務がありますし、また他社との連携などもあるはず。視野の広さの大切さは大学で学んだことの一つですから、業界の外にも目を向け、積極的に挑戦し、継続的に自分を高めていければと思っています。

——最後に学長から、読者へのメッセージをお願いします。

木村 古くから海外に広く開かれ、ゲートウェイとしての機能を果たしてきた長崎の地にある大学として、急速に進むデジタル化やグローバル化のなかで生まれる新たな課題に答えられる人材の育成は一つの使命です。幸い教育改革の成果は着実に出てきており、学生の意欲の向上も見られます。本学では検定試験や資格試験などで優秀な成績を取った学生を表彰する制度を設けていますが、今年度コロナ禍において表彰者が大幅に増えました。今後もそうした流れをいっそう加速させ、これからの地域、また社会をけん引する人材を育てていきますので、ぜひ長崎県立大学にご期待いただければと思います。

\*Project Based Learningの略。課題解決型学習のこと。